

我々を乗せたセスナ機は慌ただしくアラカヌクの空港を飛び立った。小さな窓から外の景色に目をやると、少しずつ高度が上がるにしたがって眼下には一昨日まで船に乗って下っていたユーコン川が幾筋にも枝分かれし、合流し、ゆっくりと蛇行しながらベーリング海へと流れていた。無事遠征も終了し日本に帰れると云うのに一向に気分の昂揚していない自分に気が付く。寂寥感というのか軽い喪失感のようなもので気持ちは包まれていた。外の景色を眺めながら長い遠征の中で起こった数々の楽しかった事やつらかった事に思いを巡らせると、それらは鮮明に脳裏に蘇ってくる。

一日中沈むことなく北国とは思えない鋭さで肌を照りつける太陽。見上げると目眩がする程広い空。いつもは穏やかだが風が吹き始めると1メートル以上の波が立ち荒れ狂うユーコン川。そして途中立ち寄った村の人達に食事に招待してもらったりして、彼らの生活の一部に触れる事ができた。とりわけ印象深いのは、それらの村々にいる子供達との交流であった。我々が村へ上陸すると、彼らはまず間違いなく好奇心剥き出しで近寄ってくる。最初は見ると怪しい東洋人に警戒しているのか、恐る恐るといった感じで、“何処から来たの？”“何処に行くの？”“何処の国の人？”と我々を質問攻めにする。そのうち少し打ち解けてくると今度は、こっちがヘトヘトになるまで遊び相手をさせられる。冬に外で遊べないぶん今遊び溜めしているよう思えるほどに彼らは元気だった。ある時は、何かの拍子にカラテの達人と誤解され、最初は面白がって達人のふりをしていたのだが、知らぬ間に子供達の数が増え、ちょっとした観衆になってしまい、ひっこみがつかなくなり、彼らをガッカリさせたくなかったのも、少々心が痛んだが汗だくになってカラテの達人を演じつづけるはめになった。こんな楽しいことばかりではもちろんなく、テントの中でひたすら身を縮めて嵐が過ぎるのを待っている時日本が恋しくてたまらなかった。遠征中は何度も熊に襲われる夢を見て夜中に目を覚ましたり、夜テントの外で変な物音がすると、それが熊の足音のように聞こえて眠れない夜もあった。

これらの出来事はついこの間のようにも思えるし、ずいぶん昔のようにも思える。時には全部夢だったんじゃないかと思うときもある。それくらい印象深い三カ月だった。本当に数えきれない程多くの事を体験し、それによって理解し感じることができた事も多くあった。同時に、理解しえなかった事、感じえなかった事も多かったように思う。それらの事柄をどうするかは今はまだ分からない。

